



Title	メコンデルタ地域のコミュニティにみるセーフティ ネットとしての共同性
Author(s)	脇阪, 理沙
Citation	GLocolブックレット. 2013, 11, p. 123-136
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48342
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

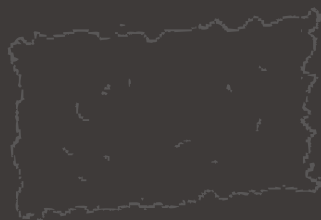
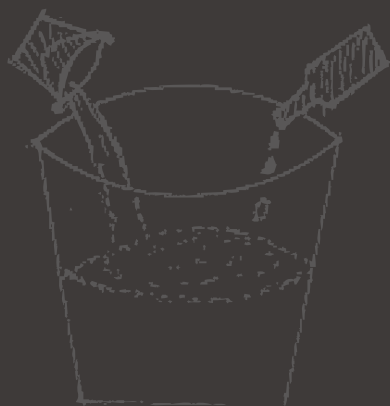
中国共产
党
上海市
虹口区
酒镇

纳
板
村



【第2部】

メコンデルタ



メコンデルタ地域のコミュニティに みるセーフティネットとしての共同性

協阪理沙

大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程

1. はじめに

本稿ではベトナム社会主義共和国(以下、ベトナム)のメコンデルタ地域において、各コミュニティで形成されている共同性を調査の対象とする。ベトナムにおいての共同性を考えるにあたり、以下の点を考慮する必要がある。ベトナムでは、政府以外の組織は、すべてベトナム共産党の指導下に置かれていると言われており、国際NGOもその例外ではない。橋本(2010)によれば、社会主義国ベトナムでは、「共同性」は国家的「公共性」に包摂された「共同性」であり、いわゆる「新しい公共性」¹も、その枠組み抜きには存在し得ない。他方で、伝統的な「むら」の復活も見られ、農村では「共同性」が生きていると考えられる(橋本 2010)。

ここで、本稿で扱う「共同性」の概念を定義したい。あるコミュニティでの相互行為を調査対象とする際、それらは「公助・共助・私助」という観点により大別できる。恩田(2008)は、「公助」を行政主体の公的行為、共助を地域住民の共同行為、自助を個人の私的な自立行為と定義している(恩田 2008)。この「共助」の概念を用いて、「共同性」を「地域住民がモノや空間を共有することから生じる相互行為」と定義する。

また社会主義国ベトナムでは、土地の所有権²が認められてい

¹ 土場(2006)によれば、「公共性」は国家に関する公的な(public)ものと定義される。

これに対し、「新しい公共性」とは、国家と市場の間に位置する多様な中間集団(第3セクター)が構成する「市民社会」により生じるものとされる(土場 2006)。

² ベトナム社会主義共和国憲法第18条では、「全ての土地は計画と法に従って国が管理し…」とあり、またベトナム民法第690条第1項は、土地は全人民的所有であり、国家によって統一的に管理されるとしている(橋本 2010)。

ない。土地の使用権は国家が国民に割り当てるか、賃貸することによって創出される。土地の使用権は50年とされているが、ただし国民は、土地を事実上の世襲として受け止めている。

さらに、今回調査を行うベトナム南部(メコンデルタ)の特徴を、以下に明記する。

- ① 19世紀に開拓されたため、歴史が浅い(約100～200年)。
- ② 地域の結び付きは弱い²が、家族や親せきなどの血縁関係の結び付きは強い。
- ③ ベトナム国内においては人口密度が相対的に低い。
- ④ 農業は商品作物生産への志向性が高い。

また、メコンデルタ地域の大半は商品米生産地であり、広大なフロンティアを抱え、土地所有規模も大きい。メコンデルタの村落は、従来「稲作モノカルチャー」と表現されている(櫻井 2001)。

2. 本稿の課題と調査概要

帯谷(2011)によれば、外国人研究者によるベトナム南部のメコンデルタ地域に関する先行研究は、相対的に少ない。ベトナム戦争やその後の社会の混乱・変動により、現地調査は難しく、それが研究蓄積の希薄さの原因であるとされている。調査研究は1990年代以降漸増しているが、自然科学系・農学系の研究が中心であり、生活者や社会問題を扱う社会学的研究は少数である(帯谷 2011)。そのため本稿では、メコンデルタ地域における生活者の共同性に着目し、地域社会における共同性がどのように機能しているかを調査する。

今回調査を行うにあたって対象とした地域は、ベトナム、メコンデルタ地域に属するカントー市である。カントー市内にあるカントー大学のご協力を頂きつつ、近隣のフォンジェン(Phong Dien)地区のミィカン村を主な調査地域とした。また、地域住民の集まる場である市内の寺院や病院も訪問した。調査時期に関して著者は、2012年の8月17～20日にミィカン村を訪れ、同年8月22日に南薬処方寺院と伝統医療病院を訪れている。今回の

2 ベトナム社会主義共和国憲法第18条では、「全ての土地は計画と法に従って国が管理し…」とあり、またベトナム民法第690条第1項は、土地は全人民的所有であり、国家によって統一的に管理されるとしている(橋本 2010)。

調査の具体的な目的は、メコンデルタ地域のコミュニティに見られる共同性から、「他者との共生」にかかわる、日本には存在しない社会システムを捉えることである。調査方法として、フィールドワークと住民や医師に対する半構造化インタビューを実施した。

3. 【ケース 1】ミィカン村の調査

ミィカン村でのインタビュー調査のフェイス項目は、以下の通りである(表1)。

表1: インタビュー調査 基本項目

	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん
性別	男性	男性	男性	女性
年齢	63歳	60代	74歳	75歳
家畜	豚(15匹)、魚	アヒル(50匹)	なし	鶏
栽培植物	ヤオ、ドリアン、リュウガン	マンゴー	リュウガン(商品作物ではない)	ココナッツ、グアバ
同居家族	妻、息子(3男)、嫁、孫(5人家族)	妻、息子(3男)、嫁、孫2人(6人家族)	妻、息子、娘2人、孫(6人家族)	夫、息子(長男)、嫁、孫(5人家族)
別居家族(子)	長男と二男	長男と二男	なし	娘3人
職業	農業	農業	レストラン・宿泊施設経営	無職

〈村内での非農業化〉

インタビュー調査データから、住民の生活状況を検討する。インタビュー自身は上記のような仕事に携わっているが、Aさんによれば、今では村内で米を作っている世帯はないという。そのため、村内には農協のような組合は存在していない。ただ、Bさんは魚や庭仕事についての会合を行う園芸会に所属しているという。園芸会は、村内にある10～20人程度の組織で、男性のみが所属する。Bさんは、畑仕事を10年前に辞めており、マンゴーの木の栽培の方が経済的であるという理由から、現在はマンゴーの木の栽培に力を入れているという。これは櫻井(2001)の「メコンデルタ地域は商品米生産地である」とする言説と矛盾する。このような現象に対しては、調査地であるミィカン村がメコンデルタ地域の中でも、稲作を行うのに適していない特殊な地形であ

ること、もしくは経済状況等からメコンデルタ全体で稲作を行う機会が減少し、農業のあり方が変化しつつあることなどが考えられる。ただ、Bさんが「マンゴーの木の方が経済的である」と答えたように、「農は商品作物生産への志向性が高い」というメコンデルタ地域の特徴に該当している。

またCさん宅は、世帯の敷地でレストランと宿泊施設を営んでいる。19部屋、最大40人が宿泊可能で、娘は観光客に料理を教えている。カントー大学への外国人留学生をはじめ、フランスやアメリカといった海外からの観光客³も多く、ベトナム政府から経済活動を評価された証として賞状を受け取っている。

さらに、インタビューには全員、同居している子と孫がいるが、Aさん宅とBさん宅の息子と嫁はいずれもカントー市内に、それぞれ電気技師と電気量販店の販売員として、勤務している。Cさん宅は世帯での自営業を家族全員で行っており、Dさん宅の息子と嫁は、村内の小学校で教師として働く。農業を行っているBさんに「息子に農業の仕事を継いでもらいたいと思うか」と尋ねたところ、「農業の仕事の仕方は知っているけれど、今は会社に行っているからできないね」という返答があった。手のかかるような畑仕事や米の生産は行われていないこと、若年層が農業とは異なる仕事に従事していることは、いずれも村内での非農業化が進んでいることの現れであるといえるだろう。

〈女性の経済活動とジェンダー意識〉

Aさん宅・Bさん宅には、いずれも幼い孫⁴がいる(Aさん宅:6歳長男、Bさん宅:4歳長女、3歳長男)。しかし彼らの両親(つまりAさんとBさんの息子と娘)は、皆市内で平日8時間程度の勤務しているため、孫の世話をするのは主にAさん夫婦やBさん夫婦である。正式なインタビューという形は取っていないが、村内の他の世帯においても、祖父母が孫の世話をしている様子がいくつか見受けられた。料理を作っているというBさんに「料理は女

性がしている場合が多いが、自分(男性)が料理をすることは気にならないか」と尋ねたところ、「気にならない。仕事は協力して分担すべき。孫のために料理を作るのも好き」と述べた。

またCさんに、近年ではよく女性が働いている点について意見を求めたところ、「日本は男尊女卑かもしれないけど、ここは平等だよ。どの仕事もできる人がやればいいんだよ」という返答があった。

Dさんは以前、さつまいもなどの作物を育てて、水上マーケットや市場で販売を行っていたという。「働きながら子育てしていたため、周りからはよく思われていなかったと思う。子どもが大きくなるまでは、母親が育てるのが普通だから」と述べている。それに対し、近年では女性がよく働いているということについては、「働くべきか、そうでないかではなくて、それは好きにすればいい。夫が稼げるならいいけど、無理なら女性も働くべき。嫁も先生だけど、家でゴロゴロしているくらいなら、働いた方がいい」と答えた。

このようにミカン村では、生産年齢である女性が職を持ち、子育てを祖父母に任せるというケースが頻繁にみられた。Dさんが、「昔は働きながら子育てをすることは、良く思われなかった」と述べたのに対して、現在では人々のジェンダー意識が弱まり、女性の社会進出が定着してきていると考えられる。

櫻井(2001)によれば、ベトナムの都市近郊村落では、村内の農業労働の多角化と都市市場への急速な移転が生じている。しかしメコンデルタ地域において、都市企業の村内展開のような農村の都市化はほとんど発生していないという。中心的な労働力は農業の多角化による農村の社会環境の維持と都市環境への参加が並行的に行われる。生産年齢の夫婦が都市部で働き、祖父母が孫の世話をするという形態がみられるのは、このような理由からだろう。

またWells(2005)によれば、労働形態の変化により、農業を辞めて賃金労働を行うようになる人々は、特に南部で多くみられる。経済構造の変化と民間企業の台頭により、労働者を保護するため、更に充実した労働法や労働組合が必要とされている。中でも外資系企業で働く人は男性の数よりも女性の数の方が多い。また2002年の世界銀行の調査において、生産年齢男性の85%、女性の83%が何らかの経済活動に従事しており、労働市場への

3 著者がCさん宅を訪れた際に、Cさん宅にバルセロナからの観光客が滞在していた。どのようにしてこの施設を知ったのかと尋ねると、「Lonely planet」というヨーロッパの海外旅行誌に、この施設が掲載されていたからだという。

4 Dさん宅の孫は14歳の中学生だが、Aさん・Bさん宅同様、幼い頃に両親が働いている際は祖父母が世話をしていた。

参加率は世界で最も高いという結果が示されている。さらに社会活動等も含めると、女性は男性よりも長時間働いているというデータもある。このように、経済状況が急速に変化するベトナムでは、生産年齢の人々は、男女問わず労働市場へ参入している。

〈ミカン村における共同性〉

国柄に拘らず、都市部と比較して農村部は、相対的に地域の住人同士の結びつきが強い⁵。ミカン村での住人同士の紐帯の強さを知るため、関係性に関する質問を行ったところ、全てのインタビューが「ほとんど毎日顔を合わせており、この村の人たちは皆お互いに知り合いである」と答えた。またAさんの妻は、「お隣さんがお金を借りるため⁶に、連帯保証人になることもある」と述べている。

ミカン村には、「女性連合」という女性のみの町内会のような組織が存在している。活動目的は趣味活動の充実と地域における経済活動の促進である。活動内容としては、趣味活動の一環として、手芸やネイルを教えるクラスを開いており、そこで作られた作品を販売することもある。またお金を集めて、貧しい人に貸すこともある。村の大半の成人女性は、女性連合に一度は加入した経験があるという。このような組織が存続していることも、住人同士の親交が深いことの現れではないだろうか。

またミカン村の住民の生活の様子を観察すると、日本には見られないとある現象が見受けられる。村の多くの人は、他人の家や庭に自由に入出入りして、他人の家の敷地内にある植物を採り、許可なく持ち帰る。著者が目にした女性は、自分の家であるかのようにインタビューの家の庭に入り、花束大ほどの植物の束を持ち帰っていった。さらに、それほどお互いに関係性の深い仲でなくても(初対面のような間柄であっても)、他人の家に数時間程度の長居をしたり、昼寝をしたりすることも、当然のこととして行われている。

夕方(午後4～5時)になると、道端に人が集まり、談笑してい



写真1: ミカン村 住民の様子

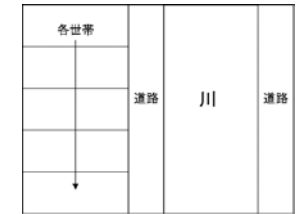


図1: ミカン村 概略図

る様子がよく見受けられた。ミカン村は、中心に大きな川が流れており、各住居は道路を挟んで川に面している。川を水上ボートが下ってきて、住民と道路でやり取りをするという状況もしばしばあった(写真1)。自身の家庭の敷地内ではなく、川に面した村の道路で魚を切っている女性もいたが、そのような場で夕食の準備をしているという。道端で遊ぶ子どもたちも多く、10歳の少女は、村には友人が多く住んでおり、「いつもこの辺りで村の子どもたちと遊んでいる」と述べた。年齢も様々で、3歳程度の子から10歳程度の子までが、一緒に遊ぶ様子が見受けられた。またその際には、道端で遊ぶ子どもたちの祖母同士が、孫を見守りつつ談笑をしていた。

Bさん宅の敷地内、道路沿いには小さな祠が祀ってあった。土地の神様であるという。他にもいくつか土地を開拓した人物を祀って祠などがあり、土地開きを記念して、村で毎年祭りが行われている。儀礼事には線香をあげ、豚をその場で殺してから、その丸焼きを住民で食べるという。

関ら(2009)によれば、祭りは「人と人を結び付ける」機能がある。「自然への畏怖・畏敬という「自然と人のつながり」、生活基盤を共有する「人と人」という地域的な「横のつながり」、また先祖と子孫、すなわち過去・現在・未来という時間的な「縦のつながり」、自然のサイクルの中での四季や種まきから収穫までという「繰り返される時間のつながり」を再認識する場」(関、中澤、丸山、田中：2009)として機能する。土地の神様を祀るミカン村での祭りは、

5 広井(2010)は、「農村型コミュニティ」では「共同体に一体化する個人」がみられ、「都市型コミュニティ」は「独立した個人と個人のつながり」がみられるとしている。

6 理由は、家を建てるためや、大学に行くためなど様々である。カントー市の社会政策銀行から借りることができる。

地域の人々との結びつきを強めることの一翼を担っているといえるだろう。

〈ミカン村の考察〉

これらの現象に関して、「共同性と共有」という観点から考察を加える。上記のような村の様子から、ベトナム農村部では、「モノや空間の共有」という概念が、現在日本社会よりも広いのではないだろうか。毎日のように近隣住民と交流をし、他人の家の敷地内のモノを自由に持ち帰る。居住している土地を奉る儀礼も行われており、共同性の強さが見受けられる。たとえば、現在の日本では、プライバシーが重視され、モノや空間の所有者を明確にする「私有化」が行われている。それに対して、ミカン村においては、私有という観念が弱く、公共観念が強い。特に「他人の住居の敷地内に許可なく入り、そこにある植物等を持ち帰る」というのは、ベトナムでは制度上、土地に所有権が存在していないこともその一因かもしれない。しかしそれらを考慮しても、道端や川付近などの公共空間で人々が交流する機会も多く、近隣住民との親交の深さから、共同性の強さが見受けられる。

またミカン村には、「一般的互酬性」の概念が存在していると考えられる。「一般的互酬性」⁷とは、主に近親間に見られる現象である。直接的な返礼を期待せずに惜しみなく与え、その返礼は漠然と期待されるが、いつどのような形で返礼しても、またたとえ返戻できなくてもかまわない(Sahlins, 1984)。

ミカン村はソーシャル・キャピタルが強く、住民は無意識のうちに生活面での共助を行っていると考えられる。このように地域に根付く共同性や互酬性は、一種のセーフティネットとして機能しているとも考えることができるだろう。セーフティネットは、杉村(2002)によると、災害・失業といった「社会的な様々なリスクから人々の生命と生活を守る仕組み」であるとされている。ミカン村で見られるこのような共同性・互酬性は、社会生活を営む際に個人の生活に生じるリスクに対応可能な、セーフティ・ネット⁸とし

ての機能を果たす共同性のあり方を示している。

4.【ケース 2】南薬処方の寺院

ベトナムでは、日本とは異なる医療サービスを提供し、かつソーシャル・キャピタルの充実も見受けられることができる施設が存在する。その具体的事例として、カントー市内の南薬を処方する寺院を取り上げる。

著者は、ベトナムカントー市内にある南薬⁹を処方する仏教系寺院を訪れた(図2)。1934年に設立され、カントー市内で南薬

を処方している寺院の中では最大規模であるという。組織の社会的属性はあくまで「寺院」であるが、南薬を処方する「病院」としての機能も担っている。1日約70人が訪れ、1日に400袋程度の南薬が処方されている。

薬草は、寺院の周囲の住人が、各家庭から持って来たり、探しに行ったりすることで賄われている。寺院の裏では、10人弱の高齢女性が木から薬品となる葉を収集する作業を行っていた。彼女たちの居住地域は様々だが、

皆給料はもらっていないという。また薬草の配合を行う場にも、ボランティアの大学生が数人出入りしていた。この寺院では南薬の処方以外に、鍼や灸も行っていたが、抗生物質のような西洋薬は取り扱っていない。寺院にやってくる患者は、以下の3つのパターンに大別できる。

- ①金銭的に余裕がない。
- ②金銭面での余裕はあっても、西洋薬では治らなかった病気を抱えている。
- ③悪性腫瘍などの重い病気を患っている。

しかし、なぜ寺院で医療行為が行われているのだろうか。これは、宗教(仏教)と医療の伝統的な関係性から生じていると考えられる。



図2: 南薬処方の寺院 見取り図

7 それに対して、等価物を交換することを意味する「均衡互酬性」という概念も存在する。例えば、モノの売買などが現象として挙げられる。

8 また、湯浅(2008)は、日本のセーフティ・ネットを(1)雇用(労働)のネット、(2)社会保険のネット、(3)公的扶助(生活保護)のネットの3種類からなると定義づける。

9 様々な効能を持つ薬草を天日干しで乾燥させ配合した、ベトナムの伝統的な薬。漢方薬に近い。一度に100グラム程度の多量の薬をお茶にして飲む場合が多い。身体の内部から、身体に負担をかけずにゆっくりと治療を行えるという特徴がある。

池口(1996)によれば、かつて医療は宗教とともに存在していたという。実際に、仏教医学の領域には内科・外科・病理・寄生虫学・看護学等が揃っている。その歴史的背景として、聖地への巡礼がある。インド仏教の聖地には多くの人が集まるため、中には病気や怪我をする人もいた。そのため聖地には聖人病院、仏示病院なるものがあり、これが一般の病院の役割を果たしていたのである。仏教の教えでは、『病人の看護』や『飢餓人への恵』などを福德が生じる行為とされていた。そのため寺院が病院をもって、一般の人々の救済にあたっていたという。そのような現象の名残は、日本にも往々にして存在している。

しかし、あくまで医療は人助けの手段であり、商売ではない。だが無料で運営を行うこともできないため、薬代や入院費ではなく、金銭的に余裕のある者からは『お布施』という形でお金をもらう。そうでない者には、無料で診療や処方を行っていた。しかし、時代とともに施薬院や療病院が分業化し、現在のような医療施設の形態となっていった(池口 1996: 16-24)。

実際、今回訪れた寺院でも、患者は金銭を支払う義務はない。受付の真横に仏壇があり、そちらに自分で払える限りの金額を、お布施として納めるという形式を取っている。また南薬処方に携わっていた地域の女性たちも、報酬としての金銭は受け取っていないことから、仏教の基本思想である「慈悲による助け合い」(池口 1996: 48)という観念が、意識的にであれ、無意識的にであれ、人々の行動に影響を与えていることの現れであるといえるだろう。

5.【ケース 3】伝統医療病院の調査

また著者は、カントー市内にある伝統医療病院を訪れた。こちらの施設は上記とは異なり、南薬に加えて西洋薬も利用しており、大規模で入院も可能な「病院」である。1978年に創設され、45人の医師が在籍する。メコンデルタ地域の中では、最も名の通った病院であるという。設立の際のベトナム政府の方針としては①南薬と西洋医学の融合、②地域医療の充実、が掲げられた。この病院も上記の寺院同様に、主に南薬を処方しているが、安価での診療・処方を行っているため、貧困者には特に役に立っているという。処方される薬のおよそ80%が南薬で、20%が西洋薬である。南薬はベトナム特有の伝統的な医療でもあり、この

病院で働く医師は「地域の知識の継承」が大変重要な点であると述べた。

患者は1日につき300～400人が訪れるという。関節症、神経症、便秘等の症状を抱える、35歳以上の慢性疾患患者が多い。治療は平均2週間程度で終わり、入院期間はおよそ2～3カ月である。

また病院の敷地内には、1990年頃に設立された炊き出し施設が存在している(写真2)。入院患者のためだけではなく、病院に

訪れた人や病気のない貧困者など、誰でも無料で食事をするができる。炊き出しに携わる人は全員が無給のボランティアであり、約10人が交代で調理を担当している。運営は勿論、食料も近隣の人々からの寄付で賄われているという。運営のための金銭に関しては、社会活動に興味のある外国人や海外の団体からも寄付がある。また、ここで注目すべきが、この施設の母体が仏教寺院であるという点である。ボランティアは仏教信者が多いようだ。また医師によると、このような施設は大きな病院の中にはどこにでもあるという。食料、人材とも自発行為で運営され続け

ているが、そこには相互扶助の精神を重視する仏教の思想が反映されているようである。

上記のように、ベトナムの伝統医療病院では低価格で医療が提供され、地域に根付いた運営が行われている。地域というひとつのコミュニティの内部での共同性が高く、相互扶助の精神が見て取れる。

〈南薬処方の寺院・伝統医療病院の考察〉

ケース2やケース3にみる寺院や病院での行為は

- ①人々の自発的精神が運営システムを支えている点。
- ②処置というサービスに対してではなく、サービスを受ける人々の生活を基準にして、それに見合った金銭の支払いを求めている点。

において共通点が見られる。サービスを提供する側も受ける側も、行動を義務付けられないこのような施設は、現代日本社会においてはあまり見受けられない。そのため、ここにみられる現象は、



写真2: 伝統医療病院 炊き出し施設

日本とは異なるセーフティ・ネットのシステムとして機能していると考えられる。

埋橋ら(2010)は、既存の制度では対応できていないケースに対して手を伸ばし、さらに関係機関や住民組織などとの連携を通して見守りのネットワークを形成する「地域のセーフティネット」という考え方を挙げている。「援助を必要としているにもかかわらず、行政や関係機関によって把握されていないケース」、「援助の必要性は把握されているが、既存の制度では対応できていないケース」、「対象者が複合的な困難を抱えているため、包括的な援助を必要としているケース」が「地域のセーフティネット」の対象である。

先述したように、日本のセーフティネットが、雇用や社会保険、生活保護といった「公」からのサポート(公助)によるものであるのに対し、今回調査を行った寺院や病院でのセーフティネットは、上記のような「地域のセーフティネット」であると考えられる。つまり、コミュニティにおける(共助)としてのサポートであるといえるだろう。

6. おわりに

3.11以降の日本社会において、人との「絆」や「つながり」といったソーシャル・キャピタルの重要性が叫ばれている。広井(2010)は、国際的に見て日本は最も「社会的孤立」度¹⁰の高い国であると指摘し、その背景として戦後の日本社会の経済成長と、農村から都市への人口移動を挙げる。都市に移った日本人は、会社や家族を越えたつながりがきわめて希薄になっていった。稲作等を中心とする農村が、そのまま「生産・生活のコミュニティ」であった時代から急速な都市化・産業化により「生産」と「生活」は急速に分離し、「生産のコミュニティ」としての会社が圧倒的な優位を占めるようになった。しかし、このような急速な拡大・成長の時代は終わりつつあり、また会社や家族という存在も多様化・流動化している。このような現状を踏まえると、日本社会における課題は、「個人と個人がつながる」ような「都市型のコミュニティ」や

10 この場合の「社会的孤立」とは、家族以外の者との交流やつながりがどれくらいあるかという点に関わっている。

関係性をいかにつくっていけるかということになる。

このような課題を抱えた日本から世界に目を向けたとき、今回の調査で見られたメコンデルタ地域における共同性は、日本社会の今後の指針ともなりうるはずだ。

例えば広井(2010)は、以下のようにコミュニティの形成原理を分類する。

表1：コミュニティの形成原理の2つのタイプ

	(A) “同心円を広げて つながる”	(B) “独立した個人として つながる”
その根拠	「共同体的な一体意識」	「個人をベースとする公共意識」
性格	情緒的(&非言語的)	規範的(&言語的)
関連事項	農村型コミュニティ	都市型コミュニティ
	「共同性」	「公共性」
	文化(個々のコミュニティに自 足する個別的なもの)	文明(複数のコミュニティが出 会うところに生成する普遍的な もの)
ソーシャル・ キャピタル	結合型(bonding)(集団の内部 における同質的な結びつき)	橋渡し型(bridging)(異なる集 団間の異質な人の結びつき)

出典：広井良典(2010) p.19

今回のケースをどちらかに分類すると、ミカン村のケースはA、寺院と病院のケースはBとすることができるだろう。そして、どちらのコミュニティにおいても、セーフティネットとして機能する共同性やソーシャル・キャピタルが存在する。一方、現在の日本社会においては、大部分がBタイプであると考えられる。また個人が多様化・流動化しつつある今、そのコミュニティのあり方も変容しつつある。今後、人々がどのような社会を形成していくにあたって、それに適応する共同性を機能させることは可能であるはずだ。

ベトナム・メコンデルタ地域の社会システムや価値観は、現在の日本の一般的なコミュニティとは異なっている。社会保障や公的扶助といった、日本に存在する制度的なセーフティネットとは異なり、メコンデルタ地域のコミュニティに適したあり方として、共同性に基づいた、明確に制度化されえないセーフティネットが存在するのである。それは住民相互の自発的援助や、モノや空間の共有による共同性に現れている。

参考文献

橋本和孝
2010 「ベトナムにおける《公共性》——戦争・都市・市場経済」『慶應義塾大学東アジア研究所業書 東アジアにおける公共性の変容』慶應義塾大学出版会株式会社。

広井良典・小林正弥編
2010 『持続可能な福祉社会へ：公共性の視座から 1コミュニティ：公共性・コモンズ・コミュニタリアニズム』勁草書房。

池口恵観
1996 『医の哲学 仏教者が語る医療倫理』紫翠会出版。

マーシャル・サーリンズ
1984 『石器時代の経済学』法政大学出版局。

Melissa Wells
2005 *ADB Strategy and Program Assessment Viet Nam: Gender Situation Analysis*: Asian Development Bank.

帯谷博明
2011 「ベトナム・メコンデルタにおける農村生活と水利用の変化——ティンジャン省チョガオ県における村落調査から」『奈良女子大学 人間文化研究科年報』26号、135-146頁。

大野美紀子
1998 「ベトナム南部村落における土地所有状況の推移——カインハウ社における農地改革の影響について」『東南アジア：歴史と文化』27号、3-27頁。

桜井由躬雄
2001 「メコンデルタ地方都市近郊村落の農業変容——ロンアン省タンアン市カインハウ社ジン集落の事例」『東南アジア研究』39巻1号、89-99頁。

関礼子、中澤秀雄、丸山康司、田中求編
2009 『環境の社会学』有斐閣。

杉村宏
2002 『公的扶助——生存権のセーフティ・ネット』放送大学教育振興会。

埋橋孝文、連合総合生活開発研究所編
2010『参加と連帯のセーフティネット：人間らしい品格ある社会への提言』ミネルヴァ書房。

湯浅誠
2008 『反貧困——「すべり台」社会からの脱出』岩波書店。

World Bank
2004 *Vietnam: A Progress Report on the Country Assistance Strategy of the World Bank Group 2003-2006*. Hanoi.

土場学
2006 「公共性と共同性のあいだ：公共性の社会学の可能性」『応用社会学研究』48号、127-138頁。